

大仏殿会議

一

「本日はおいそがしいところを皆さんご苦労さんでございました。これで、ご案内を申ししたところは、全部が全部ご出席でございます。御僧侶の方は、御住職自身がお出席のところと、代理の方がご出席のところがありますが、大体において、ご存知のことと思しますのでご紹介を略しますが、本日は、事が重大でございますので、檀家総代二名のご出席を願いました。主だったお方をこちらから順に申し上げますと、建長寺の檀家総代のお方、それからこつちが極楽寺の檀家総代のお方、あつちが寿福寺の檀家総代のお方、その隣りが浄光明寺の檀家総代のお方、つづいて、多宝寺の檀家総代のお方、そして一番最後にありますのが、これは人数が多いですが、いろいろと本日のお手伝いの意味もありまして、かくいう、当山大仏殿の総代世話人でございます。どうぞよろしくお願い申します。ついては、始めに多宝寺の御住職から「邪教を葬れ」と

いう講題で、譚々の御法話があることになっております。そして、それが終わりましたら、質疑応答といったような形でご相談を申しまして、最後に決議をしまして、その決議に従って、鎌倉中の全仏教は行動を起したいと念願しておるのであります。時間がございませんで、さつそくに、多宝寺さんの「邪教を葬れ」という講題に入るべきでございますが、主催者として、本日の会合の主旨を説明させていただきたく存じます。

本日、お集りを願いましたのは、最近に、またまた鎌倉の町々を騒がし始めましたあの日蓮坊主のことでございます。申すまでもなく、かの日蓮坊主は、弘長元年の五月十二日に伊豆の伊東に流されまして、まあ結構な案配だ、よかったよかったとお思ひになつたのは、私ばかりでなく、この席の方、全部がそうお思ひになつたろうと思うのであります。しかるに、何故か、幕府は、弘長三年の二月にはこれを赦したのであります。恐らく、私どもの想像では、日蓮坊主は前非をくいて、他宗の悪口はいうまい、彼が専売特許の折伏というのであります。折り伏すとかきましてしゃくぶくと読みます。くわしい説明は多宝寺さんから改めて拝聴することにいたしますが、近頃は皆さん方も、ようやく折伏という字がよめるようになったと思ひます。中にまだしゃくぶくなんていう人もおりますが、これ程、日蓮坊主はこの鎌倉に折伏をはやらせた本人であります……

ええつと、話が折伏ということで、私も実はこの折伏にはさんざんやまされておりますの

で、ついつい話が横道にそれまして、まことに失礼いたしました。すなわち日蓮坊主は、他宗の悪口をいうたのが理由で、伊豆の伊東に流されたのでありますから、まさか流罪を許されたからには、おそらく絶対に今後はよその宗旨の悪口はいわないであろうと思っておたのであります。私もそうだろうと思っていました。その証拠には、彼の日蓮坊主は、伊豆から許されて帰った、弘長三年の二月からは、鎌倉から姿をけしまして、いづれかにいつてしまいました。そして、鎌倉の町々寺々には、昔ながらのありがたい念仏の声が流れておたのであります。しかるに、今年文永五年になりますと、再び彼の氣違ひ坊主は、鎌倉の町に帰ってきて、以前にもまして、辻々に南無妙法蓮華經の旗をたてて、

念仏無間 禅天魔

真言亡国 律国賊

諸宗無得道 墮地獄之根源

と、がめきたてたのでございます。流罪にあつたような氣違ひ坊主のいうことでございますので、もはや誰も耳をかすものはなかりと、こつちもたかをくつたのであります、なかなかそうはいかない。世の中には変わり者というものが何時の時代にもおりまして、氣違ひ坊主の手下が、さき程申し上げました折伏といううるさいことを申しまして、私共の檀家をさわがせております。一例を申しますと、もつたいたなくも、北条時頼さまが精魂こめておつくりになつた、当

寺の大仏さまさえも、いくら拝んだって御利益があるものか、こんなものはやめてしまえ、ぶつこわしてしまえというひどい奴さえおるということをきいて驚いたのであります。まさに暴力宗教と申しましようか。文化もなにもあつたものではありません。野蛮そのものであります。なにしろ日蓮坊主の信者の奴等は神棚はいらぬ、法華経以外はみんな邪教であるというて、一切の御札は全部焼きすてる、仏像は偶像だから全部ぶつこわしてしまえという、まったく氣違いの宗旨であります。仏像もいらぬ、神社も必要ないといいましたら、この鎌倉の町になにが残るでしょう。材木座、魚座、銀座といった商店街のみではないでしょうか。商店街だけが鎌倉の文化でありましようか。いいや、違います。二百年、五百年たつてごらん下さい。今の町民の消費生活は何一つ残るものなく、残るものは神社であり、仏閣であり、仏像であり、神像であります。これらを焼きすてる、ぶつこわせ、拝むなどいうのでありますから、暴力宗教と命名しても、少しも差しかえかおりません。私も大変興奮しまして、主催者としての開会の辞をとりまちがえまして、なんだか演説じみてしまいました失礼いたしました。ではこれから、多宝寺さんの「邪教を葬れ」といった講題でお話を願いたいと存じます」

拍手が一しきり大仏殿の書院をふるわせた。鎌倉中の主だった寺の住職と檀家総代があつまつて、もちろん檀家総代は傍聴人といった資格ではあるが、由比浜辺にほど近い深沢の大仏さまで、これではわからないだろうが、今日という鎌倉の大仏さまのお寺での会議である。

今日の会議は大げさにいえば、鎌倉仏教徒会議といったところであつた。時は、文永五年の十月の末である。

「私が只今、ご紹介にあずかりました多宝寺の弁明でございます。本日は「邪教を葬れ」ということについてお話を申し上げたいと存じます。本題に入る前に一寸、何故、本日このように沢山の皆様方のご出席を得なければならなかつたかと申し上げますれば、「邪教を葬れ」というその邪教とは、何んであるかも自からわかるのでございます。それは本月の十一日のことでございます。彼の日蓮法師は、彼のいわゆる折伏の手紙を鎌倉の寺々に差し出したのであります。寺々とは、ここにお集りの建長寺さん、極楽寺さん、寿福寺さん、浄光明寺さんそしてここの大仏殿さんと私のところ、多宝寺でございます。この外にも、彼は神社奉行の宿屋入道殿と、執権職の執事たる平左衛門尉殿と、彼の唯一の権力者となつたのむ北条弥源太殿と、そして馬鹿と氣違ひにこわい者はないと申しますが、恐れ多くも執権職北条時宗殿にすら、折伏の手紙を出したのであります。何故、こんなことがわれわれにわかつたかと申しますと、彼日蓮法師が、自分でこのことをいつておるのであります。すなわち、折伏の手紙を、以上の十一か所に出した。ついでは一か所にあつまり、評定相談して御返事を下さい。出来れば、公場対決をのぞむというのでございませう。お上みが、汚がれ者として、伊豆の伊東に流した彼の日蓮であります。そんな流し者と、われわれ官職の僧位にあるものが、同席するのも恥ずかしいのに、よくも公場対決を望むなぞと口

はばつたことを申したものであります。これは、到底できないことを知って、奸智にたけた彼の日蓮法師が、つよがりにしつておるものとか考えられないのであります……。

先程、大仏殿の御住職から、折伏についてはこの私から詳細な説明があろうといわれましたから、一寸折伏ということについて申し上げますと。折伏というのは、破折屈伏の義とか、折破摧伏の意味でありまして、これはあくまでも布教の方法でございまして、宗旨とは違うのでございませう。ですから日蓮法師の実は一手販売ではなく、念仏宗、禪宗、真言宗、律宗、どの宗旨が用いてもよろしいのでございませう。これからのち、折伏がどうしても流行するのだ、それでやってくれと、檀家から注文がありますれば、私どもも折伏をやつてもよろしいのであります。すなわち折伏の折伏であります。すなわち勝鬘經というお経には、折伏に応ずる者には折伏を、撰受に應ずるものには撰受をとという経文がございませう。普通は悪人を折伏し、善人を撰受するといふ言葉がございませう。一切の人を悪人とみなすか、または善人とみなすかの相違が、折伏と撰受の別れただと考えるのであります。

さて、折伏ということは、このくらいにいたしましたして、先に進みますと、彼の日蓮が何故十一か所に手紙を出したかと申しますと、彼は文応元年の七月十六日に狂気の書ともいふべき、立正安国論を幕府に提出いたしました。

彼は、この安国論を提出したために、四十三日目には、彼の松葉谷の家は、三千人の念仏の門

徒によつて包圍せられて、焼きうちをかけられたのでありますが、この時日蓮を討ち洩らしたことは残念なことでありました。今になるとまことに、鎌倉仏教徒にとつて、痛恨事でありました。しかしながら、千葉方面に逃げておつた日蓮が、つぎの年の弘長元年の五月、鎌倉に性こりもなく出てまいりましたので、実はこの座におられる、鎌倉の有力なる諸山の御住職の方々のなみなみならぬ運動によつて、日蓮は伊豆の伊東に流罪ということになり、われわれは、安堵の胸をなでおろしたのであります。しかるところ、どういふわけか鎌倉当局は、われわれに一言の相談もなく、殺してもよい彼の日蓮を三年たつと許したのであります。今に事がおこるぞ、今にわれわれ鎌倉仏教徒に害を加えるぞと、ひそかにおそれいたのであります。ついに、これが現実となつたのであります。すなわち、これが、本日ここにお参集を願つた重大事なのであります。

皆様もご存知の通り、本年の正月十八日、大蒙古国より国書がまいりまして、国民一同の悩みのたねとなつておりますが、彼の日蓮は、この国民一同がおそれている大蒙古国の国書こそ、彼が安国論で予言したところの、他国侵逼難であると大いに騒いでおるのであります。みようによりますと、彼れ日蓮こそ大蒙古国のまわし者、大蒙古国の間者ではないかと思われるような節が多々あるのであります。さて、法華経の力によつて、蒙古国の攻めくるのを予言的中したから、法華経とわれわれの依経と、どつちがすぐれているか問答をしようという、子供だましみたいいな

ことをいつておるのであります。それを十一か所にも出しまして、つよがつておるのであります。狂人とともに走るものは狂人と申しますから、相手にはなれませんが、ほおつておいても僧侶はそれでよいでしょうが、檀家の方々信者の方々には迷いを起すものと思ひまして、ここで、根本的なことをお話し申し上げれば枝葉末節はいらないのでありますから、「邪教を葬れ」と題して、私がしばらく皆様方の時間をいただきたいと思つてあります。」

多宝寺の住職弁明はいよいよ本題に入る前に汗をぬぐつたが、思ひなしに鼻をぴくぴくさせたのも面白かつた。

一一

「さて、いよいよこれから「邪教を葬れ」という本題にはいります。先ず何故、日蓮法師の教義が邪教であるかと申しますと、それは、あまりにも現世利益をときすぎるといふ点であります。彼等宗徒のいうところに耳をかたむけますと、仏教の話をしておるのか、お医者のお話をしておるのか、あるいは、金儲けの話をしておるのか、まるつきりわからぬというような状態であります。御利益、御利益のI点ばかりであります。そんなものは、仏教ではありませんと、ここにはつきり申し上げておきます。仏の教えとはなにか、二つに分けて申しますと、自力聖道門と他力淨

土門でございます。一切衆生に皆仏性ありといいながら、何故、一切衆生は生死の巷を輪廻して、この三界の火宅をいでないのでありましょうか。自力聖道門の教えによるが故であります。他力浄土門による往生浄土門こそ、この三界の火宅をのがれる秘術であります。専修念仏がそれであります。

ええつと、一寸話しが、むずかしくなったように思いますので、もつとかみくだいて申し上げますと、念仏の教えで申しますと、われわれは、この世の中にお客さんで来たのではないぞと、教えるのであります。未来の成仏こそ肝要、来世の往生が目的であると、悟らせるのが私どもの教えであります。このわれわれのすんでおるところは穢土と申しまして、五逆十悪の人びとのすむ汚がれたところであります。一刻も早く、この汚がれたところをはなれて、阿弥陀さまの浄土に生まれるのが、われわれ念仏を唱えるものの念願であります。現世の利益などをとくのは、もつての外であります。救われようとするその気持をもつものが、もつての外と昔から戒められております。救われようとす、その気持をすてなければ、真に救われるものではありません。

仏教の根本は、浄土に往生を願うことにあります。現世が苦しければ苦しい程、来世の楽しみは大きいのであります。

病気が治る、金がもうかる、などもつての外であります。

この世の中の苦の種一切が、阿弥陀さまの許にゆく往生の種となるのであります。

病気はしない、貧乏ということがこの世の中に一切ないとするならば、誰が阿弥陀さまを拜みましようか。往生を願う人は、一人もいないでありましよう」

「日蓮法師の流れをくむ、南無妙法蓮華経と唱える人びとがいうところの、現世利益一点ばりというところが、いかに邪教であるかということが、少しはおわかりになったかと思いますが、念仏を唱える人は祈ってはならない、願をかけてはならないと申しますのは、われわれは一切を阿弥陀さまにお任せしておるのでありますから、貧乏するのも仏さまのおぼしめしであり、病気になるのも阿弥陀さまのおはからいであります。すべては、阿弥陀さまにおまかせきつての求道乗船の旅でありまして、自分からああしよう、こうしようと思うのは、間違いもはなはだしいものであります。ところが、日蓮法師の説くところは、これとまったく逆でありますから、邪教だといわざるを得ないのであります。阿弥陀さまの世界に生れることが唯一の幸福でありますのに、この幸福を否定しまして今、われわれがすんでおるこの現世に、幸福を擲もうとしておるの愚をやっておるのであります。

南無妙法蓮華経と唱えて折伏することによって、病気もなくなる、金ももうかる、幸福になるというのが、日蓮法師の垂流であります。そんなことが果して本当に考えられるでしょうか。しかも、今少し日蓮法師のいうことに耳を傾けてみますと、彼はとんでもないことをいつておるのであります。

「昼夜朝暮に弥陀念仏を申す人は、業はめでたしとほめて、朝夕毒を服する者のごとし」と口をきわめて念仏の悪口を申し、悪口ばかりではなく念仏無間地獄抄とか、題目弥陀名号勝劣事とか、当世念仏無間地獄之事とかいう書き物まであるくらいであります。いやはやどうも、手におえぬ悪法師であります。

誰が考えたとお釈迦さまが、自分で自分が地獄にゆくようなお経文を、おときになる筈がないではありませんか。このところをよくよく考えていただきたいのであります。

しかもでございます。これは話が多少政治むきになりますが、民百姓のありかたでございます」

弁明、実はといたい程に声をひくめて、話をつづけるのであった。

「民百姓が、現世の生活の幸福を願って、後生を忘れたならば、国の政治というものはどういふことになりましょうか。実はこれは重大な問題であります。日蓮法師の邪教を葬れといわれる根本は、ここにあるのであります。現世の幸福のみを、民百姓が願いましたならば、民百姓ははたらかなくなるであります。この世の中に、お客さんに来たのではないぞ、働け、働けとというところに百姓は、牛馬とことなることなく死ぬまで働きつづけるのであります。死んだら、極楽の浄土に、お客さんとなってゆけるのであると教えるところに、百姓が働くのであります。百姓が働かなければ、領主は年貢米のとりたてがでえず、年貢米のとりたてが出来なければ領主

は家の子郎党を養うことができず、従つてこの鎌倉の幕府とても安泰にしておることが出来ない
のであります。鎌倉幕府の安泰さは、朝に夕に阿弥陀さまの名号を唱えて、働け働けと、蔭にま
わつて号令をかけておるわれわれ念仏の僧侶の力に負うところが大きなのであります。そこがわか
つておればこそ、この鎌倉中の七大寺といわれる名利も、堂々たる伽藍も等しく鎌倉のお上みが
こしらえて下さつたものばかりではありませんか。

禅宗について申し上げますならば、禅は武士の宗教であります。そこでは、武士に一切は空であ
ると悟れと教えております。執着すべきものは世の中に一切ないと教えております。こう教え、
こう悟らせております。そうであればこそ、一朝ことあつて戦場に出た武士が、桜花のごとく、
きよく散ることが出来るのであります。君の御馬前にいさぎよく命をすててこそ、武士といふこ
とができます。命を鴻毛の軽きに比すとはよくいわれることでありますが、この武士に執着が少
しでもあつたならば、命をなげだすことは出来ないであります。さてこそ、一切は空だと悟
らせるのであります。禅家の一切の公案はすべてこれ、空だと悟れということにあります。この
武士に現世の利益をとく、現世の幸福を教えたならば、どうなることか考えてみて下さい。さ
あ、大変なことになります。武士が死ぬのをいやがります。命をおしむ侍が戦場にいつて、勝利
を得ることが出来るでしようか。おのずから明らかなことであります。君主は、君のために命を
おしめぬ侍を求めます。名を惜しむということは、命を惜しまぬということなのであります。君

主は、自分のために、命を惜しまぬ武士をたんとしたねばなりません。そういう武士を沢山もつた君主が強いのです。従つて、命を惜しまぬ武士を養成しなければならぬのであります。その養成を極力やつておるのが、実は禪宗なのであります」

「鎌倉中に禪宗の寺の多いのも、実はこの理屈にもとづくのであります。真言宗はと申しますならば、これはもつと実用的であります。真言は禪家が命を惜しまぬ武士を養成して、戦場において勝利を博しようとしている時に、もつと早く勝利を博しようと考えております。すなわち、敵の大將がころりと死んでしまえば、戦争なんかは、戦わずして勝利であります。これを真言宗はねらつておるのであります。すなわち真言が祈禱仏教といわれる理由が、ここにあるのであります。敵將を祈り殺して、戦勝を博そうとするのが真言であります。昔は、戦争してもなかなか大將の姓名を発表しないといわれました。大將の名が分りますと、すぐそれを真言の寺に御注進して、祈禱をやるからであります。祈りがきかないようにと、わざわざ自分の名に穢れ磨とか糞磨とかつけたといわれております。姓名があんまりきたないので、祈りがきかないのです。ええと、大分話が長びきまして脱線したきらいがありますが、日蓮法師のこない以前の鎌倉仏教界は、まことに僧侶の名にふさわしく和をもといといたしまして、同一歩調をとつてきたのであります。生まれる時は、安産を真言宗さんにおたのみする。長じては、武士は禪宗さんで精神修養するが、やがて死ぬ時は誰でも同じく南無阿弥陀仏さんでおくつてもらうといった調子で、ど

の宗旨もどの宗派も仲のよいものでした。

しかるに、ここ十年來、日蓮法師が鎌倉にきてあの四箇の格言と称する

念仏無間 禪天魔

真言亡国 律国賊

といい立ててからは、われわれ僧侶の方はまあ、狂犬の吠えるくらいにしか思わないのでありますが、どうも檀家の方はそうもいつておられず、例の折伏とかで日蓮法師の弟子や檀那たちに痛めつけられて、お互同志の中にひびが入って、どうもわれわれ宗派同志が、疑心暗鬼の心持ちがするのでございます。この際、ここで大いに親睦を計りまして、日蓮法師の垂流たちの折伏を封ずると同時に、出来ることなら、一度島流しにあつたあの日蓮坊主の首を斬つてもらうか、それができなければ、流されたならば、まだ一度も帰つて来た人のないあの佐渡島に島流しにしてもらいたいと思うのであります。そうでもしなければ「邪教を葬むる」ことは到底できません。

日蓮を佐渡の島に流すことが、本題の「邪教を葬むる」の結論だと思つてあります」

弁明の、日蓮を佐渡に流せという結論は、大仏殿の書院をふるわす程の拍手喝采であつた。

多宝寺の住職弁明の講演が終ると、大仏殿の執事がすぐに立ちあがった。

「ええつ、以上をもちまして、多宝寺の御住職の御講演を終わりました、只今より、自由質問にはいります。なんでもよろしいですから、自由に質問していただきます。解答者は、今までは御講演をお願いしまして、おつかれとは存じますが、やはり、多宝寺の御住職をお願いをいたしたいと存じます」

パチパチと場内から拍手があがって、あまり大きくない大仏殿の書院は聴衆者で一杯であった。

「では、講師に質問いたします。先程の御講演によりますと、日蓮法師の教えは、あまりにも現世的である、御利益、御利益といひすぎると、申されましたが、この点について質問いたします」

「はい、お答えいたします…」

と、弁明が威勢よく答えると、

「一寸まって下さい。今のは前おきでして、これから、本当の質問に入るところでございますか

ら……」と質問者がいったので、場内は思わずどっと笑いくずれて、今までの緊張した気分が一寸ほぐれたような案配であった。

「では、どうぞ…」

解答者に、うながされて、

「私の考えを申し上げます。現世的な利益はいけないと申されますが、そもそもです。わが国において、寺として最古を誇る大阪の四天王寺の建立は、いかなる原因で創建されたかと申しますと、欽明天皇の朝に、わが国に仏教が渡来しますと崇仏派と排仏派の二派に分れたことは、みなさまご存知の通りであります。その崇仏派が、物部守屋との戦いに敗れんとした時に、聖徳太子が、四天王すなわち東方の持国天王、西方の広目天王、南方の増長天王、北方の毘沙門天王に、もしこの戦いに勝ったならば、お寺を建立しますからと、戦勝を祈願したのであります。太子の念願がかなって推古天皇の二年に建立されたのが、すなわち四天王寺であります。寺のそもその建立が、戦勝祈願というような、きわめて現世的なことから発願されておるのであります。また、かの有名な法隆寺は、どうしうわけで建立されたかと申しますと、これは、用明天皇が御病気になられまして、心たのしまなかつたので、御言願をたてられて、この病気が治りましたなら、お寺をたてて薬師如来を安置いたしますとお祈りしたのを、推古天皇と聖徳太子が、その御遺志をついで法隆寺を創建されたのであります。すなわち「推古天皇六年、太子詔を奉じて、

「勝鬘經」を講説せられ、その布施として、播磨揖保郡佐多の地五十万石を受け、これを伊河留^{いかわる}が我本寺、中宮尼寺等に分納され、法隆寺造寺費となる」とあるのであります。なお、金堂薬師如来坐像、高さ二尺七寸、光背（仏像の背後の光相）高さ二尺六寸三分これが法隆寺創建当初の金堂本尊でありますが、その光背に、天皇の御病氣を治さんがために、薬師像をつくると、先程申し上げたことが、きざまれておるのであります。また、推古天皇三十一年に、聖徳太子の御遺命によつてつくられた法隆寺の金堂の釈迦三尊の光背にも「当に、釈像尺寸王身を造くる、この願力をこうかつて、病を転じて寿をのべ、世間に安住せん」ときざまれておるのであります。寿をのぶとか、世間に安住するとか、極めて現世の利益を願つて仏像をつくつておるのであります。特に推古天皇の二年、天皇は聖徳太子や大臣蘇我馬子に詔勅を下して、仏教を興隆せしめたために、臣下以下群臣にいたるまで、競つて仏舎を造営し、これを寺と称すとありますが、その年に出来た釈迦仏の光背の銘に「現存父母の為に、敬して金銅の釈迦像を造り奉つる」とあつて、すなわち現存の父母とあつて、菩提をとむらうというのではなく、今現に生きておる父母のために、現世の福を祈るために仏像をつくつたと、光背にきざみこんだのが、今に残つておる程であります。これらのことを考えますと、寺も、また安置する仏像も、すべて現世の利益を願うということが出来ておるのであります。その後今の世にいたるまで、寺の数は一万一千三十七所、神社は三千一百三十二社と一説にいわれますが、これ等の神社仏閣はすでに戦勝か、当病

平癒かで、かならず出来ておるのであります。それ以外の理由で、寺や神社が創建されたということは先ずないといつてよいのであります。こうなってくると、日蓮法師があまりにも、現世利益を説くということを非難するのはよろしいのですが、ふりかえつてみて、自分の宗旨はどうか、現世利益は一寸も説かないかというところ、そうはなかなかいきれないのではないのでしょうか。ここに極楽寺さんの檀家の方もおられますが、極楽寺の御住職良観上人は、祈雨二十七度といわれる程、雨を祈つて雨をふらせておりますが、これとても、御皇室の方よりその発端は起つておるのであります。すなわち、皇極天皇は、その御即位の年の八月一日に、南淵河上に行幸し、經を衆僧によましめて、御自分は脆拝して、雨を祈願し給うたところが、大雨がふつたといわれております。八月五日、天下皆歡乎して、至徳天皇と称し奉つると或る書にみえておる程であります。

さて、このように歴史をさかのぼつて、寺院建立や仏像彫刻の動機をしらべてみると、現世を祈らないものは一つもなく、精神修養のためにお寺を建立したとか、精神修養のために仏像をきざむとかいったことは絶対にないのであります。この点をいかにお考えでございませうか。おうかがいたします」

「これはこれは、あなたのは質問ではなくて、一場の御講演のようにはなりましたが、いかがなものでしょうか。これからは質問は要旨をのべて、ごく簡単をお願いをしておきます。さて、

只今の御質問にお答えをいたします。仏教が、現世利益を説くということは、なにも歴史をさかのぼる必要はなく当然な話であります。だが、その利益をいかに主張するかにあるのであります。仏の教えは、われわれがいかに生くべきかを教えておりますから、現世の利益という点にもふれてはおりますが、生きて生きぬいた最後にくるものは、なんでしょう。それは生きるということを否定する死というものにぶつかるのであります。生きるということは、実は死ぬということであつたのです。毎日毎日、私どもは死というものに、ぶつかるべく生きて行くのであります。いくら怠け者でも、こればかりは怠けることが出来ない、死への行進であります。では、人間、死が最後かと問われますと、これまた実はそうでは毛頭ございません。死によつて、新しい命がひらけるのであります。すなわち往生の思想であります。つまり極樂に往生するという浄土門の教えが、そこに現われてくるのであります。これが先程講演の劈頭に申し上げました、仏教の極限ということなのでございます」

「講師質問！」

この時、聴衆の中から声がかかったので、多宝寺の住職は話を中断された。

「はい、なんででしょうか」

「今までうかがつたところでは、仏教は現世利益を説いてはいけなないと先生はいうのでありますが、この点だけを簡単にうかがいたいのであります」

どつと笑いが聴衆の中から起つた。質問を簡単にせよという、講師の答弁がちよつと長かつたので、皮肉に聴衆の方から簡単な答弁をと請求したのがおかしかつたのである。

「その点を今から申し上げようと思つておつたのでして、その往生が……」

「先生、簡単に願います」

誰かが野次つたので、またどつと笑いが起つた。講師たる多宝寺の住職は一寸渋い顔をしたが元氣につづけた。

「現世利益の是非を簡単に申しますならば、次のようにいえます。すなわち、人間の欲望を是正するのが、仏の教えでありますから、その人間の欲望をますます發展させたり、人の欲望を利用するような説き方をするのでありますならば、それはすでに、仏教ではなくて邪教であるという事が出来るのであります」

「質問！ 質問！」

二、三人が一時に声をあげて多宝寺の住職を驚かせたが、ざわめきたつた書院一杯の大勢の空気を押さえるようにして、多宝寺の住職は一人の人を指さした。

「はい、あなたっ」

「はい。しかし先生、戦さをすれば、誰でも勝ちたいのが人情であり、病氣にかかれば早く治りたいのが誰しも願うところでありますから、そういうことを願つてはいけなさと教えることは到

底できないのではないかと思います。私の宗旨は、現世利益はすこしもありませんよといったならば、誰が宗旨を信ずるものがありましようか。失礼ですが、ここにおける御僧侶全部の顎の下がひあがつてしまうのではないかと考えます」

「はい、私も質問です」

多宝寺の和尚も矢つぎばやの質問に一寸くたびれたとみえて、すなおに次なる質問者を指さすのであった。

「現世利益の点については、もう多く論議されましたから、結論は各人が出すか、講師先生が結論なさるかは後程に願ひまして、私はこういうことを質問したいと思ひます。すなわち、ここ十二、三年来天変地夭がつづきまして、飢饉や疫病に、人びとは苦しんでおるのであります。この時にあたりまして皆様御僧侶方は、大伽藍にすまわれて、われわれ民衆とは失礼ながら、遠いところに生活されております」

質問の主旨が変わつたのと、直接自分達の生活のことをいい出したので、さあつとした緊張感が書院一杯にあふれて、僧俗ともに急に真面目な顔を一樣にしだした。質問者は言葉をつづけた。

